

平和

中学校 高校
社会 地歴 総合

NHKスペシャル 58分

(2005年放送)

終戦60年企画 そして日本は 焦土となった～都市爆撃の真実～

この番組の良さ



なぜ都市爆撃が行われたのか

第二次世界大戦では、空からの爆撃で都市が戦場となり、世界で百万人を超える市民が犠牲になりました。中でも被害が大きかったのは、ドイツのドレスデン空襲と、終戦まで5か月に及んだ日本焦土作戦でした。目標を限定した精密爆撃路線が否定され、国際法が禁じていた都市への無差別爆撃が拡大していった経緯を、米軍側の資料と元兵士の証言で描きます。

国際法の存在

第一次世界大戦以前から市民への爆撃を禁止する空戦法規がありました。これを最初に破ったのがドイツと日本でした。その爆撃を痛烈に批判したアメリカも、戦争の早期決着のために市民への無差別都市爆撃を計画しました。この番組は、戦争終結の手段としての都市爆撃や、国際法との関係について考えるきっかけとなります。

番組活用のポイント

都市爆撃の作戦の詳細を知ることができる

第二次世界大戦中、史上最悪の都市爆撃によって40万人以上の日本の市民が犠牲になりました。アメリカ軍の対日爆撃作戦文書には、「58万4千人を焼き殺す」「地獄と化す」「今後の戦いの基準となる」などと記されています。アメリカは、日本の大小さまざまな180の都市の航空写真をもとに、爆撃エリアを綿密に計画しました。都市爆撃を実施したアメリカ軍の資料から、爆撃計画とその結果もたらされた大惨事を学び、平和学習の一環にすることができます。

都市爆撃が激化した歴史から考える

1922年、「市民を戦争に巻き込んではいけません」という考えから、イギリス・アメリカ・日本など6か国の代表がオランダのハーグに集まり、戦争のルールを話し合いました。そこで合意された空戦法規案には「市民への爆撃の禁止」「無差別爆撃の禁止」がうたわれました。しかし1930年代、ナチス・ドイツと日本がまず都市爆撃を行い、国際的に非難されます。第二次世界大戦では連合軍が、ドイツ国民の士気をくじくためドイツ東部のドレスデンに無差別爆撃を行いました。アメリカは、日本への無差別爆撃をイギリスから勧められたものの、当初は反対していました。しかし、戦争の早期決着へと戦略を変更、日本が戦場で行った残虐行為は許せないという意識も手伝って、市街地を標的とする無差別爆撃に踏み切りました。交戦国同士の報復が報復を呼び、その結果、主に市民が犠牲者となる都市爆撃が激化していったのです。戦争は加害者も被害者も深く傷つけるという事実を学ぶことができます。